

使徒の働き20章17-35節 「御言葉と共に送る教会生活」

1A 生活に生かされる教え 17-25

1B 謙遜 17-21

2B 走るべき行程 22-25

2A 最後の宣言 26-32

1B 気を配るべきこと 26-28

2B 目を覚ますべきこと 29-32

3A 責めない生活 33-35

本文

使徒の働き 20 章 17 節から 35 節までを皆さんとともに見ていきたいと思います。私たちが LCF の教会として、その中心にしているのが、聖書通読の学びです。その中で神さまが私たちに何を願われて、御心としておられるのかを見ていきたいと思います。

ここはパウロが第三次宣教旅行を終えて、これからエルサレムに向かうために急いで旅路についている箇所です。彼はギリシヤにいましたが、そこから同胞の民ユダヤ人が神を礼拝して集っているエルサレムに向かっています。途中、不信者のユダヤ人たちの陰謀が発覚したので、舟に乗ることをせず、陸路で向かっています。そして、ミレトという港町に着いて、そこでエペソにいる長老たちを、ミレトまで来るように伝えました。そこで語ったのが、パウロの言葉です。パウロは、これをもってエペソの人々には会えないだろうと予測して、彼にとって彼らに対する最後の説教となります。彼はここで、どのようにしてエペソにある教会を建て上げたのかを話しています。

1A 生活に生かされる教え 17-25

1B 謙遜 17-21

17 パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。20:18 彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。19 私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。

パウロは、自分がエペソの町に入ってきて福音を伝えたのですが、彼は口でイエス・キリストを語るということの前に、「私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか」という言葉を言っています。そうです、パウロというと私たちは非常に雄弁で、そして演説のように人々に神の言葉を聞かせ、それに特化した人であるかのように勘違いしてしまいます。けれども、全くそうではなく、彼は自分が「どのように一緒に過ごしてきたか」ということを、話しています。

ここから早速、私たちの教会生活の手本があります。これから私たちは、パウロが福音を伝え、また神の国のご計画の全てを伝えたという教えについて見ていきます。けれども、それらの教えが「共に過ごす」という生活の中で行われていたことに注目しないといけません。彼はテサロニケの人たちにも同じことを話していて、こう言いました。「1テサロニケ 2:6-8 また、キリストの使徒たちとして権威を主張することもできたのですが、私たちは、あなたがたからも、ほかの人々からも、人からの名誉を受けようとはしませんでした。それどころか、あなたがたの間で、母がその子どもたちを養い育てるように、優しくふるまいました。このようにあなたがたを思う心から、ただ神の福音だけではなく、私たち自身のいのちまでも、喜んであなたがたに与えたいと思ったのです。なぜなら、あなたがたは私たちの愛する者となったからです。」彼は、使徒としての権威を振る舞わなかった。つまり、先生ずらしませんでした。むしろ優しく、母親のように接していたと言います。そして福音の言葉だけでなく、自分の命までも捧げたいと思うほど、慕わしく感じていたのです。つまり、生活をそれだけ共に過ごしてきました。そこで、キリストにならって生きていくとはどういうことなのかを、自然に信者たちは体得していきました。これが教会生活の特徴です。教会生活は、まさに「生活」なのです。ですから、私たちがどれだけ共に過ごすかということが醍醐味になります。

パウロが彼らに見せていた姿勢は、一つに、「謙遜の限りを尽くし」ということでした。教師として、本物か偽物かを知る物差しは、謙遜かどうか、と言えるでしょう。パウロが後で話しますが、彼が建てた教会には、偽教師たちがやって来ていました。そして、彼らは権威を振り、なんと信者たちを打ち叩くというようなことさえしていました。コリントの教会で起こっていました。「2コリント 11:20 事実、あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、だまされても、いばられても、顔をたたかれても、こらえているではありませんか。」

恐ろしいことですが、これは起こります。なぜこうなるのかと言いますと、御言葉を教える権威が教師に与えられているからです。神の言葉を語るのも、その人がすばらしく見えたり、何か自分たちより霊的だと見なすのです。実際はそうではありません。神の恵みにより、救われた罪人です。ただ救われただけであり、恵みによって立っているのです。そして恵みによって神の言葉が与えられている。ただ、それを忠実に、熱心にその賜物を用いて、主のしもべに徹する必要があります。ところが、本人たちが、聞いている人々から称賛を受け、あたかも自分が何様かであるようにうぬぼれます。そして高ぶり、そのように振る舞うのです。しかし、パウロはそうではありませんでした。パウロは、彼らと共に過ごしました。そして、使徒としての大きな権威が与えられていたのに、優しく振舞ったのです。

次に、「涙をもって」とあります。これは、パウロに心が与えられていたからです。神の言葉を取り次いでいるのですが、人々が弱くなっている時に、その弱さに同情していたのです。イエス様がそうでありました。神の国の福音を宣べ伝えられましたが、弱り果てた羊のようになっているのをご覧になって、可哀想に思われました。その通っているところに共にいたので、共感していたのです。これも、私たちが共に生活をしなければ出てこない感情です。また、自分が何か受け取ること

だけを考えていても、出てこない思いです。自分はキリストの体の一部なのだ、だから誰かが泣けば、自分も泣き、誰かが喜べば自分も喜ぶ、という一体感が必要なのです。

さらに彼は、「ユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練」と言っています。福音を聞いてもそれを拒んだユダヤ人は、パウロの語る福音につまずきました。それで彼を迫害しました。そして、知らず知らずのうちにユダヤ人たちはパウロを貶めるべく画策していました。そうした試練の中で彼は語っていました。ここにも教会生活のエッセンスがあります。私たちはそれぞれ、試練を受けます。だれかが試練を受けているのを、他の部分は見ます。こうやって見ていく中で、私たちはますます信仰が清められ、互いに励まし合い、慰め合うことができます。

20 益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、21 ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。

ここに見えるパウロの姿勢は、「熱心」でありましょう。あるいは「勤勉」という言葉がふさわしいかもしれません。一つは、「益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました」ということですが、これはいわゆる「遠慮しなかった」ということです。語るべきことが、人にとって時に悲しませてしまうことがあるかもしれません。聞いている人にとって、罪が示されて、自分のあり方が間違っていることに気づいて、それで痛くなり、辛くなるかもしれません。けれども、それが悔い改めをもたらして、益になるのであれば、パウロはためらうことなく語りました。まっすぐに語ることの重要性を彼はここで話しています。「2コリント 7:9-10 今は喜んでいます。あなたがたが悲しんだからではなく、あなたがたが悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちのために何の害も受けなかったのです。神のみこころに添った悲しみは、悔いのない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。」

そして、彼は公のところで語りました。これは主にまだ信じていない者たちに対する伝道です。また家々で語りました。当時は、教会はそれぞれの家で語っていました、大きなところで集まることはできませんでした。ですから、この長老たちは、それぞれの家の教会の指導者ということになります。そして分け隔てなく話しています。「ユダヤ人にもギリシヤ人にも」であります。福音を語るのに、分け隔てをしませんでした。そして語っていたことは単純であり、かつ純粋な真理でした。「神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰」です。この福音にこそ、人を救う神の力があつたのです。ですから、私たちがいつも、開拓精神を忘れてはいけません。開拓精神とは、イエス様が罪人を救うためのこの世に来られたという心を忘れないことです。誰に対しても分け隔てなく語り、そしていろいろなところで、福音を語り、御言葉を教えます。

2B 走るべき行程 22-25

22 いま私は、心を縛られて、エルサレムに上る途中です。そこで私にどんなことが起こるのかわ

かりません。23 ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。24 けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。25 皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見る事が出来ないことを、いま私は知っています。

聖霊によって、パウロは、また他の人々にも、パウロがエルサレムで苦しみを受け、縄につながれることを示されていました。けれども、パウロはエルサレムに向かうことをそれで控えることはしませんでした。これは、彼がいつも、無茶な行動に出たことを意味しません。彼は数限りない陰謀によって、殺されかけましたが、いろいろな方法を使って逃げています。けれども、彼には自負がありました。それは、「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができる」という自負です。エルサレムに行き、そこで同胞のユダヤ人たちに神の恵みの福音を語る任務が果たせると思っていました。彼は、これまで異邦人に福音を十分に語ったことを確信していました。

ここで大事な言葉が、「自分の走るべき行程」です。パウロは手紙の中でも、私たちの信仰生活に競走としての例えを多く使っています。ここで大事なことが二つあります。一つは、自分の行程だということです。他の人の行程ではないのだ、ということです。それぞれに与えられた行程があります。走るべき道筋があります。ある人にとっての行程は、他の人にとっての行程ではありません。ですから、私たちは比べる必要はないのです。いや、比べてはいけません。それぞれに、走るべき行程があり、そこを走るのです。キリストの体は、いろいろあるので、それで健全に機能します。足ばかりではいけません、口だけでもいけません。手もあり足もあり、それで体全体が調和します。自分が主に語られ、その語られたところに留まって、しっかりとその分を果たす必要があります。

もう一つは、「走り尽くす」ということです。フルマラソンであれば、42.195 kmを走りつくします。それがどんなに遅くても、走り尽くすことが大切です。けれども、自分は、走り始めは調子よく走りまわります。自分はこれなら、結構走り抜けることができると思います。けれども、自分の足が疲れると、結構調子よく走っていたころの自分と比べて、それでその遅さに耐えきれなくなって、あきらめてしまうのです。いいえ、調子悪くても前進していることが大事なのです。完璧になってはいけません。今、自分の立っているところから少しでも前に進めばよいのです。大事なことは、走り尽くすことであり、イエス様は最後まで走った者たちに対して、褒美を与えられるのです。イエス様は、フィラデルフィアにある教会に対して、「あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。(黙示 3:8)」と言われました。少しばかりの力なのです、けれどもその力をもってイエス様の名を否むことはしなかった。

私たちも同じです。今は好調に走っているかもしれません。いや疲れて立ち止まりたくなくなっているかもしれません。あるいは、走るのをやめてコース、行程から離れたいでしょうか？だからこそ、

私たちが互いにいます。互いに励まし、勧め、愛と善行を促すのです。「ヘブル 10:24-25 また、互いに勧め合って、愛と善行を促すように注意し合おうではありませんか。ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。」

2A 最後の宣言 26-32

1B 気を配るべきこと 26-28

26 ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。27 私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。28 あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

ここが、パウロがエペソの長老たちに対する、宣言であります。彼には、神からの務めがありました。もしその務めを果たしていなければ、自分自身に災いが下ると思っていました。けれども、今、務めを果たしたので、その裁きについては責任を負わないとのこと。もし、彼らがそれに応答しなければ彼らが裁きを受けますが、パウロは災いを受けません。もし語らなければ、災いを受けます。こういった類いのもです。これは、福音宣教においての原則ですね。語る事が命じられているのであり、相手が悔い改めるかどうかは、その相手の責任であります。

「**神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた**」という言葉、ここから、チャック・スミスは、聖書を創世記から黙示録まで一節も漏らすことなく教えていく務めを与えられました。神のご計画が、創世記から黙示録に渡って明らかにされています。神の国が、聖書全体に渡って明らかにされています。それを余すところなく伝えたいのであれば、聖書全体を伝えていくことが教会において可能であります。この神のご計画を全て「知る」ということは、聖書を読み、その知識を蓄えること自体が大切なのでは全くありません。知識を蓄え、クイズ大会で多くの点数が取れるような知識であるならば、全く意味がないし、とんでもない勘違いであります。そうではなく、私たちが信仰生活において、また教会生活において、神の国を見せていくことなのです。聖書に啓示されている神が今も働き、そして私たちが、神の国の福音を生き、そして伝えていくためです。

私たちには聖書が与えられています。「2テモテ 3:16-17 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」聖書が全て、神の言葉なのです。そしてその全てが教え、戒め、矯正、義の訓練のために有益なのです。そして、良い働きのために神の人が整えられるのに十分に足るのです。そして、エペソ書では、牧者の働きは、「聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるため(4:12)」とあります。全てに神の息が吹き込まれているこれら言葉によって、私たちが整えられます。聖霊によって清められます。主の似姿に

近づいていきます。そして、成長して、成熟へと向かいます。そして、教会に一致が与えられます。そこにキリストが確かにおられます。そして世に対して、私たちがキリスト者であることが明らかにされるのです。

ロゴス・ミニストリーのサイトには、既に以前行なった、聖書の学びが創世記から黙示録までありますが、それを急いで聞いていき、聖書全体を読んだところで、このことは成し遂げられません。キリストの体は、私たちが子供から大人に成長するように、徐々に、徐々に行なわれます。聖化というのは、忍耐のいる作業なのです。忍耐こそが、人をキリストにあって成熟させる大事な要素なのです。私たちはその過程で、思春期を迎えるかもしれません。一体、神は私に対してどんな計画を持ってられるのか？分からなくなつて悩む時があるかもしれません。まっすぐな真理が、聖書が教会において説き明かされることによって、それで自分のあり方が明らかにされて、それで苦しむかもしれません。それでも、主の前に出て恵みをいただき、そして御霊によって変えていただく。これこそが、創世記から黙示録まで読んでいる目的なのです。

そして、その神のご計画全体を余すところなく教えることによって、それで教会の群れを牧することができる、監督ができると言っています。28 節の一つ一つが興味深いです。まず、「あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。」と言っています。つまり、牧者たちは、群れのことに自分自身のことを気をつけなさいと言っていることです。テモテにもパウロは、「自分自身にも、教える事にも、よく気をつけなさい。(1テモテ 4:16)」と言っています。教える事が正しいかどうか、私はかなりの注意を払っています。けれども、その前に「自分自身にも」と言っています。ここでも、まずは「自分自身」に気を配りなさいと言っています。自分の心の動機、また行ないや言葉、そうしたものを気をつけなさいということです。神は、建物や組織に油を注ぐのではなく、人に対して聖霊の油を注がれます。ですから、全体を見る前に、まず器である自分自身に気をつけていれば、聖霊が流れてくださるということです。

それから、「群れ」であります。群れとは、もちろん羊飼いが羊を飼っている群れということです。旧約聖書では指導者を牧者と呼んでいました。羊飼いは、群れを守り、そして養う役目があります。同じように牧者は、教会の群れに御言葉によって養いを与え、また悪いものから守る務めを持っています。そして興味深いのは、パウロが長老たちに対して、「群れを飼いなさい」と言っていることです。長老とは年老いた人というのが元々の意味ですが、そこから、霊的に治める人のことを意味します。今、教会においては牧者と長老が全く別個の務めとして考えられているところが多いですが、新約聖書ではそれほど明確ではありません。同じ人々が、牧者であり、また長老であることが多いです。そして、「監督」をしなさいと命じています。監督は、そのまま「全体を見ている」という意味です。ですから、監督者という働きが、牧者、また長老に与えられているということでもあります。ですから、新約聖書では、誰が牧者で、監督で、長老かという役職について語っているよりも、どのような働きをするのか、ということに重点を置いています。

そして、次が大事です。「聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会」と言っている野ですね。聖霊が教会を買い取られました。聖霊が教会を導きます。牧者ではありません。牧者は飽くまでも、管理者です。聖霊が主権者であられます。ですから、私たち一人一人が聖霊に聞かないといけません。聖霊に力づけられ、導かれなさいといけません。「自分は牧師が言っていることをやればいいのだ。」というものでは決してないのです。指導はもちろんしますが、主が自分に何と語っているのかを真剣に聞かないといけません。そして、「神がご自身の血をもって」とありますが、イエス様のことですね。イエス様を神とパウロは呼んでいます。イエス様が神であることがはっきりと宣言されているところです。そして、ここは「神の教会」です。神が支配され、神が所有しておられる教会です。ですから、聖霊が主導権を握り、私たちはこの方にそれぞれが聞き、そして神ご自身が育て、成長させ、キリストが血を流して買い取られた体を大人にまで仕立て上げてくださるのです。

2B 目を覚ますべきこと 29-32

20:29 私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中には入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。20:30 あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。20:31 ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。

パウロは既に、エペソにある教会に違った教えをする者たちが入ってくるという問題を察知していました。「狂暴な狼」とは、恵みの福音を台無しにするような教えです。律法について論じているようで、空想話であり、自分たちで何を言っているか分かっていない、とパウロはテモテに手紙を出した時に、書いています。論争を引き起こすようなもので、全く神の救いのご計画の実現をもたらすものではないのです。そして、神の救いのご計画は、「きよい心と正しい良心と偽りのない信仰とから来る愛を、目標としています。(1テモテ 1:5)」とあります。しかし、無益な議論に走ってしまっている状態が、後に起こりました。そして残念なことに、今、聞いているエペソの教会の長老からも、健全な教えから離れてしまって、違った教えをし始める者たちが出てくるとのことです。人々が、そうした偽教師たちに持って行かれるからでしょうか、自分たちのところに信者を留めたいと思って、そうした違った教えをする、というのです。

これは生々しい現実です。教会の中で起こります。いろいろな教えの風が、キリスト教会には流れています。そして、このような教えが入ってくるので、そこから守られるためにも、神のご計画の全体を余すところなく知るといふ営みが必要だということです。パウロはテモテに対して書いていました。そして終わりの日には、次のようになると前もって伝えてあります。「2テモテ 4:3-4 というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそられて行くような時代になるからです。」自分の好きなことを聞きたい、という思いが純粋な御言葉を

聞きたいという思いに先行します。そして、そのようなことを言ってくれる教師たちを自分たちで寄せ集めて、空想話に逸れていくようになります。ですから、私たちがこのように学んでいっているのは、こうした悪い教えから守られるためでもあるのです。

20:32 いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中において御国を継がせることができるのです。

ここでパウロが、なぜ神のご計画を余すところなく伝えたのか、その目的が書かれています。それは、パウロがここを離れても、神とその恵みの言葉が、彼らを育て、聖なる者として、そして来る御国を受け継ぐことができるようにするのです。「イザヤ 55:11 そのように、わたしの口から出るわたしのことばも、むなしく、わたしのところに帰っては来ない。必ず、わたしの望む事を成し遂げ、わたしの言い送った事を成功させる。」だから、大事なのです。牧者ではなく、他の誰でもなく、神ご自身がご自身の言葉で、私たちを成長させるのです。そして、聖めてくださるのです。そしてイエス様が再臨される時に、その神の国を豊かに受け継ぐことができるようにしてくださるのです。

3A 責めのない生活 33-35

33 私は、人の金銀や衣服をむさぼったことはありません。34 あなたがた自身が知っているとおりに、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。35 このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」

最後にパウロは再び、自分が正しい良心をもって、エペソにおいて主に仕えてきたことを述べます。サムエルが晩年に、イスラエル人に対しても、「もし私があなたがたから、羊やろばを取ったのであれば、返す。」と言ったのですが、それは何か悪いことをしていないか尋ねているところです（1サムエル 12:3）。そして責めがない生活をしていただけでなく、弱い人々を助けるために労苦したことを述べています。イエス様がそうであったからです。パウロはこのことを最後に言っていますが、普段はこうした労苦は目につくものではないし、目についていけないものですね。イエス様が命じられたとおりです。けれども、パウロは今、長老たちに話しています。彼らに、こうした態度、仕える者として生きなさいということを受け継がせたかったのです。

このように、パウロのお別れの説教は、盛りだくさんの内容が含まれていました。まさに、私たちが模範とすべき教会の建て上げであります。私たちも、この中に生かされています。神がみなさんを、キリストの血によって買い取ってくださいました。ご自分のものとしてくださいました。そしてご計画全体を知っていくことによって、成長し、聖められ、確かに御国を受け継ぐ者とされます。